

川や海、森や湖に接する機会が多い釣り人は、動植物たちの次に、環境の変化に敏感でいられる存在なのかもしれない。だからこそできること、やらなければならないことがある……



ノースアングラズアイ 9

# 川はよみがえる

オシヨロ川の生息域の南限として知られる真狩川。クレソンが茂り、バイカモが揺らめくこの川で、大規模な河川改修工事が行なわれたことは、ご存じの方も多いだろう。あれから5年。南限のオシヨロ川は今も健在なのだろうか……

文◎滝川康治

(ルポライター・下川町在住)

## 南限のオシヨロ川を守った市民の声

### 湧水の清流を排水路とみなす行政

**羊** 蹄山麓の湧水を源とする真狩川(流路延長33・8km)は、年間をとおして水温、水量とも安定している清らかな流れである。この川に棲むオシヨロコマは、世界分布のなかではアジアの南限付近にいたり、学術的にも貴重な種といわれている。

5年ほど前、この川の源流部のオシヨロコマが絶滅の危機にひんしたことが

ある。「多自然型工法」を採用した北海道開発局の河川改修計画が持ち上がったのである。

この計画を知った「北海道の森と川を語る会」(代表Ⅱ小野有五・北大教授)の働きかけで、事業者側は工事を全面的に見直すことを約束し、最悪の事態は避けられることができた。市民の声の高まりに行政が応えて、よりよい川づくりに向けて踏み出したのである。

河川改修のあり方に一石を投じた「真狩川の試み」は、次のような経過をたど

った。

真狩村市街地の下流からニセコ町の尻別川合流点付近までの真狩川では、「融雪出水などによる河岸決壊を毎年のように受け、(洪水時には)流下能力も小さく、地元から改修に対する陳情もある(河川管理者の道建設部)との理由で、1960年代終わり頃から次々に河道の拡幅工事が行なわれてきた。そして90年代に入り、オシヨロコマの生息密度が高く、繁殖地にもなっている真狩川の中心部から源流部に至る区間に、工事の手がのびるようになった。

この区間内での工事はふたつある。市街地に村が造成した親水公園に併せ、自然石の床固工や護岸をしたのは、91年度に道が施工した区間だ。「多自然型」という言葉が聞かれ始めた頃の工事なので、人工的な公園という感否めない。今では水際の植生が回復しつつあるが、不自然な印象を受ける。

もうひとつは、90年度から96年度にかけて、この公園のすぐ上流で小樽開発建設部知安農業事務所が行なった改修工事で、「語る会」から中止要請が出された区間である。

この工事は、前出の公園の上流から同村泉地区の源流部までの約3kmを、農業用の排水路に利用する計画。14億5000万円の事業費が見込まれた。94年秋に「語る会」が行動を起こした時には、すでに2kmの工事が終わった段階にさしかかっていた。

事業の正式名称は「泉排水路」で、受益農家は40戸。クレソンが茂り、バイカモ



改修工事が行なわれた直後、湧水の清流は単調な水路と化していた。このような工を行なう感性には、疑問を抱かざるをえない

North Angler's Eye

が揺らめく湧水の清流を「排水路」として位置づける、川に対する慈しみが全く感じられない、いかにも土木屋的発想の計画だ。

「(真狩川の)断面が狭小で河床が高いため、農作物に多大な浸水被害などを与え、管農上の大きな支障になっている」というのが、当時、小樽開建が挙げた工事理由だった。

これに対して「語る会」は、

「流域は水はけのよい火山灰の斜面地域であり、源流部の流量の変動はほかの河川に比べればずっと小さいはずで、多大な被害があるとは思えない。真狩川はまわりの火山灰地を切り込んで流れている。その谷底に集落はなく、たとえ河道から水があふれたとしても、被害は出ない地形と土地利用がなされている」と、工事の必要性そのものに疑問を投げかけた。90年に発足した「語る会」は、「川には森がなければならぬ」とを合言葉に、北海道の川をどのようにしていったらよいか、みんなで考えるための集まりである。「原則として反対運動はしない」というのが会の主旨だったが、真狩川だけはその禁を破った。オシヨロコマが絶滅するかどうかの瀬戸際に立たされてきたからだ。

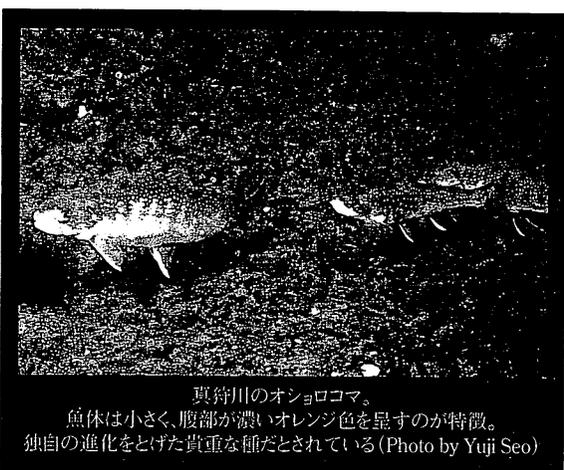
源流部の工事を中止させた市民の声

氷

河時代が終わって川の水温が上昇するとともに、道南のオシヨロコマは絶滅したとされている。しかし、羊蹄山の冷たい湧水のおかげで、真狩川

周辺には生き残った。数万年にわたって独自の進化をとげたらしい。そのため、真狩川のオシヨロコマは魚体が小さく、腹が赤い希少種で、学術的な価値が高いとされている。

オシヨロコマが生息することは事業者側も知ってはいた。そこで、「人と自然にやさしい工法」をうたい文句に、自然石を利用した護岸や段差の低い落差工を取り入れ川筋をゆるやかに蛇行させ、



真狩川のオシヨロコマ。魚体は小さく、腹部が濃いオレンジ色を呈するのが特徴。独自の進化をとげた貴重な種だとされている (Photo by Yuji Seo)

河畔林もいくらかは残すなどの工夫を試みたという。

しかし、実際のやり方は、川底に敷きつめた石が大きすぎ、オシヨロコマの産卵が不可能な「魚が繁殖できない工法」だった。「魚の生態を学んで工事のやり方を考える」という基本がまったく分かっていなかったのである。

実は、「語る会」が運動を始める前年

真狩川を訪れた皆さんへ

この川には、世界的にも生息南限とされている貴重なオシヨロコマがすんでおられる。特にこの周辺は、数少ない産卵場所とされています。

この貴重なオシヨロコマとその生息環境を守るため、この周辺での釣りを控え、ゴミ等を捨てないよう皆さんのご協力をお願いいたします。

真狩川

釣りを控えるよう訴えた看板。私たち釣り人は今後、種沢や産卵場所付近ではサオをださない勇気が必要になってくるだろう。真狩川にいたっては、禁漁という措置を検討してもよいのかもしれない

(93年)には、工事によるオシヨロコマへの影響について、道立水産孵化場真狩支場が独自に調査し、改修済みの区間では、稚魚の生息に欠かせない流速の遅いところや、クレソンなどの茂みがないことなどが判明していた。これらの問題点について、同支場は俱知安農業事務所に指摘していた。しかし、事業者側は聞きおくだけで、市民から声が上がるまで、無謀な工事を続けた。

94年11月「語る会」は小樽開建に対し、翌年以降の源流部での改修工事を中止するとともに、すでに破壊されたオシヨロコマの産卵場所や稚魚の生息環境の復元工事を行なうよう求める文書を出した。また、道小樽土木現業所や真狩村には、源流部を公園化する計画を見合わせることを要望。現地視察も行なった。新聞やテレビでも報道され、真狩川に対する関心が高まった。

こうした動きに、小樽開建はいち早く

対応した。

現地視察の時には、「自然に配慮した工事をしてきたつもりだったが、理解が浅かった」と認め、工事を見直す意向を示し、改善案を提示。95年5月には、「川底に産卵床本来の砂利を敷き直すなど、工事の手直しをする」「源流部で予定していた工事を行わず、今後の改修は最小限にとどめる」の2点を「語る会」に約束した。市民の声に耳を傾け、迅速な取り組みを打ち出した小樽開建の対応は、高く評価できると思う。

こうして源流部の産卵床は守られ、オシヨロコマが激減する事態は避けることができた。そして、すでに工事を終えた区間では、「魚の棲みやすい川」に戻す試みが始まった。

川は自らよみがえる

改 修工事の見直しから5年、真狩川はどう変わったのだろうか。当時、



見直しの工事が行なわれた後、川は少しずつかつての面影を取り戻しつつある。湖の下流には産卵に適した浅瀬が形成されている(写真上)。川の中央部に置いた石の下流に土砂が堆積し、中洲が形成されている。植物が自然に生え、違和感のない復元が進んでいる。周囲には産卵に適した場所も形成されていた(写真下)



事業者側から相談を受け、改善策を考えてアドバイスした経験がある妹尾優二さん(流域生態研究所代表)と一緒に、新緑の頃の現場を歩いてみた。  
水の力を利用して、水に川をつくらせる。これを妹尾さんは「自然河川工学」と呼んでいる。瀬と淵は人工的につくるのではなく、水の力によって自然につくられるというのが基本思想。人間は、そのきっかけを与えて手助けしてあげるだけという発想だ。5年前に真狩川で試みたのもこの手法だった。

妹尾さんが相談を受けた時、現場には人の頭ほどの大きさの石が敷き詰められていた。これではオシヨロコマが産卵できるはずもない。  
そこで、河床をパワシャベルで掘削して深みをつくり、不自然に配置されてきた自然石を動かすなどの手を加えた。最初の工事では、河床全体を平らな瀬にしてしまったため、瀬と淵があった元の状態に近づけるように試みた。  
上流部には1cm前後の砂利を置いてみた。オシヨロコマは比較的流心寄りの瀬の部分を産卵場所に選ぶことが多いという。そこで、下流に流された砂利によつて、産卵に適した場所がつけられるように手助けする手法を取った。

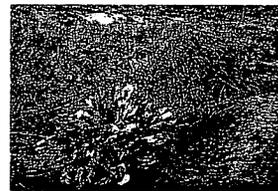
「私がやったのは、両岸の護岸を撤去できないなかで、水が自由に動けるきっかけをつくることでした。事業の範囲内で、ぎりぎりのタイミングでやれた。以前なら考えもできなかったことで、こうした川づくりをやれたのは、担当者の理解があったからですよ」  
箱メガネでオシヨロコマやヤマメを



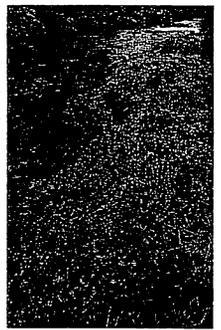
魚の生息状況を見る妹尾さん。この日は、ヤマメやオシヨロコマの稚魚が確認された



岸沿いに網を入れると、オシヨロコマの成魚と稚魚、ヤマメの稚魚などが見られた。オシヨロコマの産卵は無事に行なわれているようである



川が自由に動けるように手直しをした結果、流れに変化が生まれた。土砂が堆積した場所には植物が根つき始めている。河川改修には、自然の復元力を最大限に活かす工夫が求められる



観察する手を休め、妹尾さんが当手を振り返った。  
クレソンやミゾソバ、エゾノカワジシヤなどが生える水辺を上っていくと、大きな石の下流がほどよい淵になっている。岸辺の草むら近くでは、稚魚の姿も見えた。挿し木したヤナギは、大きいものは3m近くに成長している。両岸に蒔きつけた牧草や、石の護岸の不自然さは感じられるものの、川は自らの力で元の状態に戻ろうとしていた。  
「川の中に置いた石が土砂で埋まって中洲ができ、その下流には産卵に適したところも生まれていた。予想したとおりの展開になっていますよ。水の力でこまめに川づくりをしたところは、全道的に見てもないかもしれません」  
3年ぶりに真狩川を歩くという妹尾さんが、満足そうな表情を見せた。  
市民の問題提起に行政が柔軟に対応し、川をよく知る助言者の知恵を借りて改善策を施したことで、真狩川は少しずつよみがえろうとしている。  
**今後の川づくりはどう活かすか**  
**『真狩川の試み』から私たちが学べることはたくさんある。**  
それは、魚の生息に影響を与えてしまう改修工事を耳にしたり、目撃した時には、その中身について説明を求め、具体的に指摘していくことの大切さである。真狩川では、「オシヨロコマを救おう」を合言葉に市民団体が声を上げたことで、行政も改善策を真剣に考えるようになった。きっと、ほかの川でも同じことが

## North Angler's Eye



妹尾俊二(せおゆうじ)  
1951年、後志管内赤井川村生まれ。4歳から釣りを始め、川や魚を友として育つ。小学校時代のヤマ釣りや妹尾さんになかう者はいなかった。70年に倶知安農業高校を卒業後、札幌の民間会社で20年間にわたって河川計画や環境調査などに携わる。「生態系を重視した川の環境調査をしたい」と考え、91年に独立。江別市内の自宅において流域生態研究所の代表として、全道の小中学校などで川をつづじた環境教育を実践中。「大地と川の外科医」を自認する。本業は、環境コンサルタント業務などを行なう「(株)エコテック」の社長



環境教育に力を入れている妹尾さんが制作した子供向けの絵本「北海道の川に棲む魚たちの話」。川の魚たちが河川環境について話し合うというユニークなストーリーで、子供にぜひ読ませたい1冊。河川改修に携わる関係者にこの発想があればと考えてしまう、大人が読んでも関心する内容だ。

●問合せ先 (株)エコテック (☎011-737-3070)

できるはずだ。

その時、「魚が釣れなくなるから困る」と訴えるだけでは説得力に欠ける。疑問を持つたら、自ら勉強し、魚が減少する具体的な理由を提示してみてもはどうだろう。釣り人なら、そのための基礎知識をある程度は持っているはずだ。

工事をすると川がどう変わり、魚の生息や産卵にどんな影響を与えるのか。別の工事の方法はないのか……。魚の生態に詳しい人の話を聞くなどして、釣り人なりに学んでいくこともできるだろう。

釣り歴45年の妹尾さんが、こんなふうに提言してくれた。

「釣り人は、魚を釣るだけでなく、川のことを知るべきです。自分は釣りのなから川を考え始め、そこには複雑な世界があると分かってきた。おもしろい気持ちで川を見つめると、魚も植物もいろいろな反応を示す。(工事によって)何年か後に川の形状がどうなるかを読みとっていく。そこから具体的な川づくりの方法を見つけ、行政に提案

していくと、真剣に受け止めてくれます」

「川は一番身近な自然です。魚がいなくなったら、そこにはヒトの姿も見えなくなる。みんながそのことを理解しなければいけません」

工事の見直しから5年後の今回の取材時、回復し始めた川岸の植生の周囲には、2〜3cmのオショロコマの稚魚が無数に見られた。産卵は無事に行なわれたようである。

真狩川の改修工事は、そもそも工事自体が本当に必要だったのかという疑問は残る。しかし、市民の声に行政が応え、川づくりについて考えるきっかけになったことは確かだ。この事例をムダにすることなく、今後の川づくりに活かしていくことが重要なのではないだろうか。

道内では未だに、コンクリートで固めて「魚の棲めない川」にしてしまっ、無配慮な河川改修が行なわれている。そんな工事を見つけた時、真狩川の事例を思い出してほしい。●